

赤土へくる子供たち

小川未明

青空文庫

一

釣りの道具を、しらべようとして、信一は、物置小舎の中へ入って、あちらこちら、かきまわしているうちに、あきかんの中に、紙につつんだものが、入っているのを見つけた。しました。

「なんだろうか。」

頭を、かしげながら、ほこりに、よごれた紙を、あけてみると、べいごまが、六つばかり入っていました。信一は、急になつかしいものを見いだしたようにしばらくそれに見入っていました。そのはずです。一昨年の春あたりまで、べいごまが、はやって、これを持って原っぱへ、いったものです。それが、べいのやりとりをするのは、よくないというので、お父さんからも、先生からも、とめられて、ついみんなが、やめてしまったが、ただ記念にしようと思つて、これだけすてずに、紙に包んで、しまつておいたことを、思い出しました。

「やはり、こまはおもしろいなあ。」

お天気はいいし、子供たちのあそんでいる声が、きこえるし、もう信一は、じつとして、家いえにすることが、できなかつたのです。べいごまを、ふところへ入いれると、赤土あかつちの原はらっぱをさして、出でかけていきました。

原はらっぱには、武たけちゃんや、善ぜんちゃんや、勇ゆうちゃんたちが、あそんでいました。

信一しんは、ふところから、べいを取り出として、土つちの上うえで、まわしてみしました。これを見みけると、善吉ぜんきちが、遠とくからかけてきました。

「信しんちゃん、なにしてんだい。」と、さげました。

「なんでもない、ただ、まわしてみただよ。」と信一しんは、べいをひろい上あげて、また紙かみの中なかへ、入いれました。

「君きみ、べいごま？」

「うん、そうだよ。」

「いくつ、持もっているの？」

「六つしかない。」

善吉ぜんきちは、あんなに、たくさん持もっていたのに、どこへやったのかと、いわぬばかりの顔かおつきをして、信一しんを見みました。

「あんなにあつたのを、どうしたんだい。」

「みんな川へすててしまった。」

「おいしいことをしたね。」

「だって、お父さんが、すてろといったから。」

善吉は、自分も同じようなめに、あつたことを、思い出していました。

「君は？」と、こんどは、信一がたずねました。

「ぼくは、いま十個持っているよ。あとは、ごみ箱へ、すててしまったのさ。」

善吉が、こう答えると、信一は、目をまるくして、

「いまなら、くず屋さんにやると、いいんだね。ごみ箱の中へ、すてたりして、おいしいな

あ。」と、いいました。

「ぼくも、十個かくしておいたのを、持つてこようか。」と、善吉は、いいました。

「あ、持つておいでよ。」

このとき、あちらから、勇二と武夫が、

「なにしているの。」と、口々に、わめきながら、やはり、かけてきました。

「べいごま。」

「ぼくも持つているよ。」

「いくつ？」

「ぼくは、十五個ばかり。」と、武夫たけおが、いいました。

「おお、たくさんあるんだな。」と、みんなが、感心かんしんしました。

「勇ちゃんゆうは、持っていないの。」

「僕は、十個ばかり。」と、勇二ゆうじが答えました。

「なんだ、みんな、持つているんだな。じゃ、ここへ持つてきて、まわしっこしない？」と、善吉ぜんきちがいました。

「しようよ。ただやるだけなら、いいんだろう。やったり、とったりして、かけなけりやね。」と、勇二ゆうじが、いいました。

「ほんとうは、それでは、おもしろくないんだがな。」と、武夫たけおが、いいました。

「だめ、見つかったら、しかられるから。」

「さあ、早くみんな、家へいつて、持つておいでよ。」と、信一しんが、いいました。

「オーライ。」と、子供たちは、元気よく、いっさんに、原っぱはらから、かけ出して、きえてしまいました。

まつさきかけて、つつこめば

なんともろいぞ、敵の陣

馬よいななけ、かちどきだ

信一は、うたいながら、しきりに、べいをまわして、しばらく、しなかった、手ならしをしていました。

すると、このとき、ぴかりと、自分の顔を、あかるくてらしたものがあります。とんぼでも飛んできて、さわったのでないかと、顔をなでてみました。そして、べいのまわるのを見てみると、また、ぴかりとしました。

「なんだろう？」

信一は、頭が上げて、原っぱを見まわしました。はじめ、だれもいないと、思ったのに、あちらに、材木のつんである上で、女の子が、あそんでいました。

よく見ると、かね子さんと、光子ちゃんらしいのです。そして、ぴかりとしたのは、だれか、コンパクトに、ついていいるかがみで、日をてりかえして、自分に、いたずらを、したのです。

信一が、じつと見てみると、二人は、くすくす、笑っていました。

「知^しっているよ。」と、信^{しん}一^{いち}が、その方^{ほう}へ走^{はし}っていきました。

「私^{わたし}たち、なんにもしないわ、おままごととしていたのよ。」と、かね子^こさんがいいました。
「コンパクトのかがみで、やったんだい。」

「ほほほ。」

「信^{しん}ちゃん、そこにいるの。」と、まっ先^{さき}にかけてきたのは、善吉^{ぜんきち}でありました。つづいて、武夫^{たけお}に、勇二^{ゆうじ}が、手^てにこまをにぎってかけてきました。

「ああ、ござが、ないなあ。」

「だれか、だいと、ござを、持^もつてくると、いいんだね。」

「だいは、いらないけれど、ござがなくては、できないよ。」

こまは土^{つち}の上^{うえ}では、よくまわらぬからです。勇二^{ゆうじ}は、足^{あし}に力^{ちから}をいれて、赤土^{あかつち}の上^{うえ}をト
ン、トン、と、ふんできました。かたくして、そこで、こまをまわそうということです。

「土^{つち}の上^{うえ}では、だめだよ、だれか、家^{いえ}にござを持^もつていない。」と、信^{しん}一^{いち}が、いいました。
そこへ、また、あちらから一人^{ひとり}の少^{しょう}年^{ねん}がかけてきました。

「小山^{こやま}が、きた。」

小山^{こやま}は、かね子^こさんの兄^{にい}さんです。

「べいをするのかい。」と、小山こやまが、ききました。

「ごぎがなくて、こまって、いるんだよ。だれか、ごぎを、さがしてこないかな。」と、勇二ゆうじが、いいました。

「私わたし、家うちへいつて、持つてきてあげるわ。」と、かね子こさんが、いいました。

「ばか、家うちにごぎなんか、ないじゃないか。」と、小山こやまは、かね子こさんをにらみました。

二

十日とおかばかり前まえのことでした。新緑しんりよくがすがすがしいの木きの下したで、たたみやが、しごとをしているのを、かね子こさんは、立つて見ていました。いつか赤あかいインキをこぼして、お父とうさんにしかられてすぐインキけしでふいたけれど、どうしても、そのあとがとれなかつた茶ちやの間のたたみも、新あたしい青あおい草くさのかおりのする表おもてにかえられました。

もうこれから、毎日まいにちあのよごれた、たたみを見みなくてすむのであります。そんなことを思おもつて見みていると、おもしろいように、ほうちようの刃はが入はいります。するとごぎが切きれていきます。そのあとを太ふとい針はりが、すいすいとぬつて、じょうぶな糸いとを通していきま

す。半^{はんじよう}畳^{じよう}のところへくると、半^{はんぶん}分^{ぶん}だけ^{だけ}ご^ござ^ざが^が残^{のこ}りました。かね子^こさんは内^{うち}へかけこ
んで、

「お母^{かあ}さん、新^{あた}しい半^{はん}分^{ぶん}の^のご^ござ^ざが^が残^{のこ}つたの、どうするの？」と、ききました。

「しまつておけば、入^{にゆう}用^{よう}の^のこ^こが^があ^ありますよ。」

「ねえお母^{かあ}さん、私^{わたし}に^にち^ちよう^{よう}だいよ。」

「なんにするんですか。」

「私^{わたし}、おま^おま^まご^ごの^のとき、しくんですの。」

「そんなら、大^{おお}き^きい^いの^のが^がい^いい^いで^でし^しよう。」

「私^{わたし}、古^{ふる}い^いの^のは^はい^いや、新^{あた}しい^いの^のが^がい^いい^いの。」

「あげてもいいですよ。」

かね子^こさんは、喜^{よろこ}んで、半^{はんぶん}分^{ぶん}の^のご^ござ^ざを^をも^もら^らつ^つて、物^{もの}置^{おき}の中^{なか}へ^へしま^まつ^つて^てお^おき^きま^ました。

いま善^{ぜん}ち^ちや^やん^んや、勇^{ゆう}ち^ちや^やん^んや、信^{しん}ち^ちや^やん^んた^たが^が、べい^{べい}ご^ごま^まを^をす^する^るの^のに^に、ご^ござ^ざが^がな^なく^くな^なつ^つ
てこ^こま^まつ^つて^てい^いる^るの^のを^を見^みて、しま^まつ^つて^てお^おい^いた^たご^ござ^ざを^を、思^{おも}い^い出^だした^たの^ので^です。そ^それ^れで^でか^かして^てあ^あげ^げ
ま^まし^しよ^よう^うか^かと、い^いつ^つた^たの^ので^でした。

「ばか。」と、兄^{にい}さん^{さん}に^にし^しか^から^られ^れて、かね子^こさん^{さん}は顔^{かお}を^を赤^{あか}く^くし^しま^ました。け^けれ^れど、自^じ分^{ぶん}の^のも

のを、かしてやって、しかられるわけはないので、

「物置ものおきにあるわよ。」と、かね子こさんはいいました。

「あれは、ぼくんだい。」と、小山こやまは、妹いもうとをにらみました。

「いいえ、あれは、私わたしのよ。」

「ぼくが、手工しゅこうをするのに、お母かあさんからもらったんだい。」

友ともだちは、二人ふたりの方ほうを見みていましたが、

小山こやまくん、かしてね。」と、信しん一いちが、いいました。けれど、小山こやまはだまっていました。

「ねえ、辰雄たつおくん、いいだろう。」と、善吉ぜんきちがいました。

「ぼく、べいを持つもていないから、つまないもの。」と、小山こやまが答こたえました。

「ごぎをかしてくれれば、一つあげるよ。」と、勇二ゆうじが、いいました。小山こやまは、急きゆうに、た

のしそうな顔色かおいろになりました。

「ほんとうかい。」と、小山こやまは、かけだしました。

「だれが、うそをいうもんかね。」と、武夫たけおと勇二ゆうじは、顔かおを見みあつて、につこり笑わらいまし

た。

小山こやまは、ごぎをかかえて、もどつてきました。このとき、かね子こさんは、

「光子さん、あっちへいつて、じゆずだまを取りましようよ。」と、いいました。草むらの中には、つゆくさがむらさきの花を咲かせていました。へびいちごの赤い実が、じゆくしていました。あちらでは男の子たちが、べいにむちゆうになっています。

「ごさが新しいから、気持ちがいいね。」

「勇ちゃんの角は強いなあ、辰ちゃんの一つしかないべいがすつとんでしまった。」と、善ちゃんが笑いました。

小山は、しよげてしまいました。せつかく、勇ちゃんがくれたのに、また勇ちゃんに取られてしまったからです。

「ぼくが、一つあげよう。」と、こんどは、武夫が一つこまを小山にやりました。

「やりとりしつこなしなんだろう。」

「うそつこでは、つまらないや。」

「わかると、先生にしかられるよ。」

「ああ、いちばんあとで、みんなかえそうや。」

みんなで、そんなことをいつていると、

「ぼく、もうかえろう。」と、小山がいました。

「かえるの？ もつとあそんでおいでよ。」

「勉強べんきょうしないと、お母さんかあにしかられるもの。」

小山こやまは、しいてあるごぎを取りとかりました。

「辰ちゃんたつ、かしておきよ。すんだら持もつていくから。」と、武夫たけおがいました。

「よごと、手工しゅこうのとき、こまるもの。」

「そんな、いじわるをいうもんでないよ。」

「ほんとうだい。ごぎがなければ、べいができないじゃないか。」と、勇二ゆうじが、おこり出だしました。

小山こやまは、こういわれると、ごぎにかけた手てをひっこめました。

「辰ちゃんたつ、べいを一つあげよう、これは、ほんとうに、君きみにあげるのだよ。」と、善吉ぜんきちが、こまをやって、小山こやまのきげんを、なおそうとしました。

「さあ、みんなでやろう。辰ちゃんたつ、もうすこしあそんでいたって、いいだろう。」

こういいながら、信一しんいちは、ブーンとうなりをたて、こまをごぎの上うへへ投げ入いれました。こまは元氣げんきよくまわりました。そこへ善吉ぜんきちも、勇二ゆうじも、武夫たけおもいっしょにこまを投げ入いれました。

こまは、たがいふれ合つて、ぱつぱつと火花を散らしています。ややおくれて、辰雄（たつお）ももらったこまを投げ入れました。辰雄（たつお）のこまもすごいきおいを出してまわっていたが、けつきよく武夫（たけお）のこまが、どれもこれも、はじきとばして天下（てんか）を取りました。また、小山（こやま）は、こまを一つも持たなくなつたのです。そのさびしそうなようすを見て、信一（しんいち）は、

「辰ちゃんに、一つあげよう。」と、いつて、ひらたい、ぴかぴか光つたのをやりました。

「おお、そのべたをやるの。」と、勇二（ゆうじ）が、目をまるくしました。

「かしてあげたのさ。」と、信一（しんいち）は答えた。そうきくと、なんと思つたのか、

「いらない。」と、いつて、辰夫（たつお）は、そのこまを信一（しんいち）の手に返しました。

「どうして。」と、信一（しんいち）は小山（こやま）の顔をふしぎそうにのぞきこみました。

「ぼく、もうかえるんだよ。」

「ほんとうに、これ、君（きみ）にあげるよ。」

「ぼく、もうかえるんだ。」

小山（こやま）は、こういつて、また、ごぎを取りにかかりました。

このとき、じつと小山（こやま）のすることを見ていた善吉（ぜんきち）が、

「いじわるのけちんぼめ。」と、いつて、小山（こやま）のごぎを、自分（じぶん）のはいていたくつで、ふみ

にじりました。

「何なにするんだ。」と、小山こやまは、善吉ぜんきちを、おしたおそうとしました。ひよろひよろとなつた善吉は、

「なにを。」と、小山こやまに、とびついていきました。

三

「おい、けんかは、およしよ。」と、信一しんいちが、いいました。

「いじわるをするから、けんかになるんだ。」と、みんなが小山こやまの顔かおを見みました。

「ぼくのござだもの、かつてじゃないか。」と、小山こやまは、顔かおを赤あかくしながらいいました。

「そのかわり、べいをやったらう。」

「こんなもの、ほしくはないよ。」と、小山こやまは、一つの手てに持もっていたべいを、なげすてました。

「急きゆうに勉強べんきやうするなんて、いわなくていいね。」と、武たけちゃんが、いいました。

「勉強べんきやうのことなんかいうのは、てんとり虫むしのいうことだ。」

「いらんお世話だよ、だれかみたいに、ランドセルなんか、もらわないからいいよ。」
「なんだと。」

武^{たけ}ちゃん^は、はずかしめられたので、小山^{こやま}のご^ござを^をめり^{めり}と^ひ引き^ひさきました。

「やあい、いいきみだ。」と、勇^{ゆう}ちゃん^が、手^てを^をたたきました。

小山^{こやま}は、しくしくと泣^ないて、かえりかけました。

「いいか、おぼえておれ。」と、小山^{こやま}は、泣^なきながら、こちらを^をふりかえりました。

「いいとも、あそんでなんかやらないから。」と、善^{ぜん}ちゃん^が、答^{こた}えました。

「石^{いし}を^をなげてやろうか。」と、武^{たけ}ちゃん^が、足^{あし}もとの石^{いし}を^をひろいました。

「およしよ。」と、信^{しん}ちゃん^がとめました。

兄^{あに}のいじめられたの^のを知^しると、かね子^こさんが走^{はし}つてきました。

「なんで、みんなして兄^{にい}さんをいじめ^いめるの。」

「なまいきだからさ。」

「かしたご^ござを^をかえ^かしておくれ。」

「そこにあるの持^もつておゆきよ。」

「こんなやぶれたのでないのかえしてよ。あす学^{がっ}校^{こう}へい^いつたら、先^{せん}生^{せい}に^いうから。」

「いくらでもおいしいよ。」と、武ちゃんたけが、おこつて、たたきにかかる、かね子こさんは、逃にげていきました。

「けんかなんかして、つまらないなあ。」と、善ちゃんぜんが、ポケットからボールをだして、空そらへ向むかつて投げなげあげました。

「ボールをしようか。」

そんなことをいつているところへ、鳥打帽とりうちぼうをかぶつて、足あしにゲートルをまいた男おとこが、ステッキについて、原はらっぱをみんなのいる方ほうへ、歩あるいてきました。

「あつ、いつかきた紙かみしばいのおじさんじゃあない？」

「そうだ、おじさんだ。」

「おじさあん。」と、みんなが、さげました。

「おうい。」と、おじさんが、笑わらいました。

「どうしたの、おじさん、しばらくこなかったね。」

「ああ、商しょうばい売いがえをして、このごろは、お話はなしをして学がっこう校をまわっているのだ。」と、おじさんは草くさのはえたところへ、こしをおろしました。

「なにか、おもしろいお話はなしはないか。」と、おじさんが、みんなにききました。

「おもしろい話^{はなし}って、どんな話^{はなし}？」と、信^{しん}ちゃんが、いいました。

「なんでも、君^{きみ}たちが見た話^{はなし}さ。」

「おじさん、してあげようか。」と、善^{ぜん}ちゃんが、いいました。

友^{とも}だちが、みんな善^{ぜん}ちゃんの顔^{かお}を見^みました。

「きのう、ぼくプールへいったんだよ。そして、泳^{およ}いでいると、どこかの子^こが、小^{ちい}さな弟^{おとうも}と妹^{もうと}をつれてきたのさ。そして、うきぶくろにつかまって、泳^{およ}きなさいといったのだよ。けれど、その小^{ちい}さな弟^{おとうも}も妹^{もうと}も水^{みづ}にはいるのが、はじめてとみえて、おそろしがってはいらないのだ。

しかたがなく兄^{にい}さんひとりプールへ入^{はい}って泳^{およ}いだのさ。そうすると、小^{ちい}さな弟^{おとうも}と妹^{もうと}が、おせんべいをたべながら、兄^{にい}さんの泳^{およ}いでいく方^{ほう}へついて、プールの岸^{きし}をぐるぐるまわっているのさ。ぼく、これを見て^み、おかしくてしようがなかった。だって、おせんべいをたべながらついて走^{はし}るんだぜ。」

「は、は、は。」と、おじさんが、笑^{わら}いました。おじさんが、おかしそうに笑^{わら}ったので、みんなが、いっしょに笑^{わら}いました。

「なるほどな。」と、おじさんがいいました。

「さあ、こんど、おじさんの番だ。」

「おれは、こないだ、北の方へ旅行をしてきたが、いなかの子は、みんな非常時なのでよくはたらいっているぞ。学校からかえると、山へいつて、たき木をせおつてくるものや、畠へ出てくわつみの手だすけをするものや、また、くわの葉のはいったぎるをかかえたり、せおつたりして、家へはこんだりする。そうかと思うと子守をしながら本を読んでいるものもある。町の子供たちのように、あそんでばかりいないよ。」

「ひどいな、おじさん、ぼくたちだつて親のおてつだいをしているものが、いるんだぜ。」
 「そうか、それは、感心なこつた。」

「まだ、おもしろい話はないの。」

「それから樺太までいったよ。」

「樺太？　たいへん寒いところまでいったんだね。」と、子供たちは、あの北のはしにつき出て、青い海の色にとりまかれた、ほそ長い島を思い出しました。

「ツンドラ地帯つて、沼地みたいな、こけばかりはえているところがある。そこへ火がつくと、なかなかきえない。何年ということなく、燐の火のようなのが下からもえ上がる。また、樺太には、人間の手のはいらない大きな森や林がある。それに火がつくと、

それこそたいへんだ。どこまでもえるか、わからないからな。そんなとき、どうするかというに、火のもえていく何十メートルか先の林を切りはらって、あきちをつくるのだ。そして、火事のある森の片方のはしへ火をつけるのだ。すると、あちからもえてくる火と、こちらからもえていく火とだんだん近づいて、どこかで出あうだろう。そのときは、どうだと思ふ。ドーンという大きな音がして、火のはしらが空へ立つのだ。そして、それで火がきえてしまうのだ。なぜって、両方からの火で、空気があつくなつて、まん中の空気がなくなるからだ。」

「ほんとにおもしろい話だな。おじさんは、その火事を見たの?」
「いや、きいた話さ。おじさんが見たのは、ある村で、馬が出征するので、駅にりっぱなアーチが立ち、小学生が、手に、手に、はたをふりながら、見送りにいくのだつた。どこも、非常時で、緊張しているぞ。」

四

原っぱのはしの方に、小さな森がありました。いろいろの木がしげっていて、風が吹く

と、葉がきらきらと波のようになみ、かがやきました。ひるすこしすぎる時分、じぶん「カチ、カチ。」という拍子木の音が、その方からきこえました。紙芝居のおじさんが、子供たちを呼んでいるのです。原っぱで、ボールをなげているもの、とんぼを追いかけているものが、一人、二人と、その方へかけていって、森の中へ集まりました。

森の中には、小さなお稲荷さまのほこらがたっています。そのほこらのとりの前は、あちらの町へつづく、ひろい道になっていました。おじさんは、とりのところへ自転車を置いて、みんなのくるのをまっています。光ちゃんときみさんは、石のさくによりかかっていました。信一も、勇二も、ほかの子供たちの中へまじって、ぼんやりと立っていました。

ちようど、そこは、すずしい日かげになっていて、頭の上では、せみがジイジイとないています。やがて、「突撃兵」という、おじさんのお話が、はじまりました。

「ある日、召集令が、忠一のもとへまいりました。彼は、手に持つ仕事道具をなげすててすぐに立ちあがった。」

『妹よ、あとをよろしくたのんだ。』

『お父さん、きようは、ご気分は、いかがですか？』

兄あにのいなくなつた後は、かよい女おんなの身ながら、妹いもうとは、はたらいて、よく父親ちちおやの看護かんごをしていました。

『長い間ながあいだ、よくめんどろをみてくれたぞ。しかし、もう私もいくときがきたんだ。ただ生きているうちに、せがれのがらをきかずにいくのが、ざんねんだ。』

『お父さんとう、そんな心こころぼそいことをおっしゃつては、いけません。』

『いや、それよりかおまえは、お父さんとうがなくなつたら一人になつてしまう。おまえも日本にの女おんなだ。なんなりと、自分の力じぶんちからでできることをして日本にのためにつくすんだぞ。』

『お父さんとう、よくわかりました。いま日本にの人は、男おとこでも女おんなでも、年としよりでも子供こどもでも、一人ひとりのこらず、力ちからをあわせて、立ちあがらなければならぬときがきたんです。私は、女おんなながら、つねにその覚悟かくごを持もっています。』

『ああ、それで安心あんしんした。』

これが、父親ちちおやのわかれのことばでした。

話はなしかわつて、こちらは、戦場せんじょうであります。敵てきは、手てごわくわが軍ぐんの前ぜん進しんをさまたげている。忠一ちゅういちの部隊ぶたいは、クリークをへだてて、その敵てきと向むかいあつていました。

あすの夜明よあけに、敵てきのトーチカをくだいてしまえという命令めいれいがくだった。忠一ちゅういちをはじ

め一命を、天皇陛下にきさげた勇士たちは、故郷へ、これがさいごの手紙を書いてねむりにつきました。

その夜中のこと、忠一一等兵は目をひらくと、国防婦人会の白い服をきた妹が立っている。おお、どうしてこんなところへきたかと、おどろいた。

『お兄さんに、知らせにまいりました。』

『なにつ、お父さんが、なくなられたか。それで、おわかれに、なんとおつしやられた？』
『はい。』と、妹がなみだぐみながら、

『せがれのでがらを、この世できかずにいくのがざんねんだと、おつしやいました。』
忠一一等兵は、がぼとはね起きました。同時に目がさめたのであります。

『お父さん、ゆるしてください。じきに私もおそばへまいります。』

おじさんが、ここまで話したときに善吉と武夫が、走ってきて、

「信ちゃん、吉川先生がきたから、早くおいでよ。」と、いつて、ほこらのうしろの方へかくれようしました。おどろいて、信一と勇二は、その後を追ったのです。紙芝居のおじさんは、何ごとがおこったのかと、思ったのでしょうか。

「どうしたのだ、どうしたのだ。」と、ききました。

「学校の先生が、きたんだよ。」

「なに、先生が。ちつともわるいことは、ないじゃないか。」と、おじさんはいばりました。

学校の先生が、七、八、上級の生徒をつれて交通整理の見学にとおつたのです。先生たちが、いつてしまうと、信一も勇二も善吉も武夫も顔を見せました。

「みんな、どうしたの？」と、おじさんがいいました。

「ぼくたち、いまどりの前で、べいをしているのを見つかったんだよ。」

「なぜここへきて、話をきかなかったの？ そんなことをするから、先生が、こわいのだよ。」と、おじさんは笑いました。

「小山くんが、先生に、ぼくたちのことをいつけたんだ。だから、先生が、ぼくたちのそばまできて、のぞこうとしたんだ。」

「あした、学校へいくとしかられるよ。」と、善吉はしよげてしまいました。

「小山くん、ひきようだね。こないだのしかえしをしたんだ。」と、信一は、いいました。

「ほんとうに、ひきようだな。」

「おじさん、このお話、後はどうなったの？」と、ほかの小さな子供が、ききました。

「このあとのお話は、またあす。これで、きようはおしまい。」

子供たちは、思い思いに、ちつてしまいました。

「おじさんは、前にきた、紙芝居のおじさんと、お友だちだつてね。」と、信一がいました。

「ああ、友だちさ、ぼくらは、みなが、いい人になって、日本の国が、ますます強くなるようにと、紙芝居をして歩いているんだ。」と、おじさんが答えました。

「じや、おじさんは、ほんとうのあめ屋さんじゃないんだね。」と、善吉は、おじさんの顔を、ふしぎそうに見ました。

「あめも売るから、ほんとうのあめ屋さん。だつてお話ばかりでは、きいてくれないだろう。」

「ぼく、お話だけでも、きくよ。」

「じや、あしたから、あめを持つてくるのをよそうかな。」

「そして、お金をとらないの。」

「ほら、ごらん。みなは、お話より、あめのほうがいいのだ。」

「お話もきいて、あめも、もらいたいのだよ。」

「ぼく、お話^{はなし}だけでもいいな。」

「だれだ、えらいぞ。は、は、は。」と、おじさんは笑^{わら}いました。

五

翌^{よく}日^{じつ}、学^{がっ}校^{こう}のかえりに、善^{ぜん}吉^{きち}と武^{たけ}夫^おの二^ふ人^{たり}は、吉^{よし}川^{かわ}先^{せん}生^{せい}からのこされました。
「きつと、善^{ぜん}ちゃん、べいごまのことだよ。」と、武^{たけ}夫^おがいました。

「ああ、それにきまっているさ。だが、なんで、べいをしていけないんだろうね。」と、
善^{ぜん}吉^{きち}は、まどの外^{そと}のかき^きの木^きを見^み上^あげていました。秋^{あき}になつてから、日^ひの光^{ひかり}が、夏^{なつ}より
もかえつて強^{つよ}いようです。一つ、一つ、さすように葉^はの上^{うえ}にかがやいていました。

「かきがなっているね、武^{たけ}ちゃん、これはしぶいのだろう。」

「あまいのかもしれない。ここから、あの枝^{えだ}へは、うつれないかね。」

「とびつけば、とどくけど、落^おちた^たらたいへんだ。」

二^ふ人^{たり}は、二^{かい}階^{かい}のまどから、かき^きの木^きを見^みながらいろいろ考^{かん}え^がつづけていました。そして、
早^{はや}く家^{いえ}へかえつて、あそびたいなと思^{おも}つたのです。それだけでなく、お母^{かあ}さんや、お姉^{ねえ}さ

んが、しんぱいしていられるだろうと思うと、こうしていることが、くるしかったのです。

「先生、早くこないかな。」

「忘れたんだろう。かえろうか、武ちゃん。」

このとき、ろうかを歩いてくる、くつ音がしたのでした。二人は、急におぎようぎをよくしていました。

先生は、教壇のいすにこしを下ろして、

「こつちへおいで。」と、善吉と武夫の二人は前へ呼ばれました。

「きのうは、家へかえってから、なにをしてあそんでいたね。」と、先生は二人の顔を

ごらんになりました。

善吉は、顔を上げて、

「まりをなげたり、べいをしていました。」と、すなおに答えました。

「べいをしては、いけないというのでなかったかな。」

善吉は、先生にそういわれると、だまってうつむきました。

「君は、どう思うね。」と、先生は、こんどは武夫に向かって、おききになりました。

「よくないと思います。」と、武夫は答えました。

「わるいと思うものを、なぜやったのだ。」

先生の顔は、しだいにおそろしくなりました。

「しまいに勝ったべいを、みんな返せばいいと思いました。」と、善吉が、いいました。

先生は、しばらくだまって、善吉のいうことをきいていられましたが、

「君たちは、わるいことをして、後でそれを返せばいいと思うのかね。」と、おつしやいました。

「先生こまをまわすことは、わるいことですか。」と、武夫が、こんど先生の顔を見ながら、ふしぎそうにたずねたのです。先生は、ちよつと頭をかしげて、すぐには、返答をなさいませんでした。しばらくしてから、

「こまをまわすことを、いけないというのではない。勝ったり、負けたりするのに、品物をかけてやることを、いけないというのだ。べいなら、その負けたこまを、勝ったものが取るというふうに、勝負の後、品物のやりとりになるからいけないというのだ。」

「先生そんなら、ただ、おたがいがこまをまわして、勝負をするぶんなら、いいのですか。」

「ものをかけたりしなければ、わるいことはない、みんなが、ただ一つぎりでな。ぼくも、子供の時分は、こまをまわすのが大すきだった。」

「先生も、べいをなさったのですか？」と、二人の子供は、おどろいた顔をしました。

「いや、ぼくの子供の時分には、べいごまなどというようなものは見なかった。もつと大形のおがたの木ごまか、鉄胴のはまったこまだった。鉄胴のこまには、木ごまは、どうして

もかなわなかったものだ。そして、こまの合戦は、それは、さかんなものだった。」

吉川先生は、自分の子供の時分を思い出して、いまのようにものをかけずに、ただ勝負をしただけで、それでもみんなが、満足したという話をなさいました。

「木ごまは、鉄胴にかかると、よく真二つにわれたものだ。そのわれるのが、またゆかいだった。しかし、つばきの木でつくった木ごまは、たいへんかたくて、なかなかわれぬばかりでなく、うまく火花をちらして、ぶつかって、どぶの中へ鉄胴をはねとばしてしまふことが、あつたものだ。」

「先生、おもしろいですね。」

「おもしろいが、べいなんか、もうよしまえ。このごろは、みんなでいっしょにたのしんで、そして、勝ち負けをきめるようなおもしろいあそびが、たくさんあるじゃないか。」

と、先生は、おっしゃいました。この時分には、先生のお顔は、いつものやさしいお顔になっていました。

「先生よくわかりました。」と、善吉が、いいました。

「わかったか。」

「わかりました。けれど先生につげ口するものなんか、もつとひきようだと思ひます。」と、武夫が、いいました。

「つげ口されるようなことをしなければいいのだ。では、もうかえるがいい。」

吉川先生は、立ち上がると、さつさと、ろうかの方へ歩いていかれました。

「黒めがねの紙しばいのおじさんは、ぼく、この話をしたら、辰ちゃん、自分がけんかのできないので、先生にいうなんてひきようだといったよ。」と、善吉が、いいました。

「おじさんは、先生をよく知っているといたね。」

「ああ、おじさんも、日本の子供は、そんなとか、とくとかいうことなんか、考えてはいない。正しいことをしなければならぬといった。」

二人は、階段を下りて、話しながら校門の外へ出たのでありました。

「善ちゃん、あの犬をござんよ。」

武夫たけおのゆびさした方ほうを見ると、白い色しろいろの犬いぬが、まりをくわえて主人しゅじんの後あとについてきました。ある家の門もんのところに、茶色ちやいろの犬いぬがはらばいになっていたが、この犬いぬを見つけると、急きゆうにおきあがつて、ほえはじめました。二ひきの犬いぬのあいだが、だんだん近づちかきました。しかし、まりをくわえた犬いぬは、知らぬ顔かおをして、わき見みもせずに主人しゅじんについていくと、茶色ちやいろの犬いぬはいまにもとびつこうとしたのでありました。

六

赤土あかつちの原はらには、だれもあそんでいませんでした。茶色ちやいろの犬いぬをつれた男おとこの人は、ボールを出だすと、力ちからいっぱい、これを遠とほくへ向むかって投げなげました。ボールは、青あおい空そらへ上あがって、それから下したへ落ちおちました。

「よし。」と、いうと、犬いぬは、かけ出だしていきました。

「おじさん、犬いぬの名なは、なんというの。」と、武夫たけおが聞ききました。

「ジョンです。あれで、まじりけのないシエパードではありませんよ。」と、おじさんは、答こたえました。

「いい犬いぬですね。」と、善吉ぜんきちが、感心かんしんしました。ジョンは、ボールをくわえてきました。

「訓練くんれんひとつですね、いい犬いぬにするには、なかなかほねがおれます。」

ジョンは、ボールを主人しゅじんの前まえへおこうとすると、

「こら！」と、おじさんはしかって、手てに持つてゐるむちでジョンをたたこうとしました。ジョンは、すぐ気がついて、右みぎから左ひだりへぐるりと、おじさんの足あしもとをまわって、ボールをおきました。「よし。」と、おじさんは、犬いぬの頭あたまをなでてやりました。それから、おじさんは、犬いぬをそこに待たしておいて、自分じぶんだけ、あちらへかけていきました。やがて、おじさんの姿すがたは、草むらのしげった中なかへ、かくれてしまいました。じつと、そっちを見みながら、すわっていたジョンは、主人しゅじんの姿すがたを見えなくなると、さびしくなったのか、クン、クン、といって、おじさんをこいしがりました。善吉ぜんきちも、武夫たけおも、忠実ちゅうじつな犬いぬが、かわいくなりました。

おじさんは、ちがった方角ほうかくから、姿すがたをあらわして、もどってきました。

「よし。」と、命令めいれいすると、ジョンは、すぐに主人しゅじんのいった足あとをさがして、ボールを取とりにいきました。

「おじさん、まりをかくしてきたの？」

「土^{つち}へうめてきたが、ちよつと見^みつからないでしょう。」と、いって、おじさんは、笑^{わら}っていました。

いつまでたつても、ジョンは、かえってきませんでした。見^みつからないのです。そのうちに、ジョンは、しおしおとして、なにもくわえずにもどってきました。これを見^みると、おじさんは、こわい顔^{かお}をして、犬^{いぬ}をにらみました。そして、手^てを上げ、

「だめ！」と、どなりました。ジョンは、また、さがしに、あちらへ走^{はし}っていきました。

「かわいそうだな、見^みつからないんだよ。」と、武^{たけ}夫^おは、犬^{いぬ}に同^{どう}情^{じょう}しました。

そのとき、少^{しょう}年^{ねん}が、きつきの白^{しろ}い犬^{いぬ}をつれてさんぽにやってきました。そして、みんなのいるところへきました。

「ポインターのかわりですね。」と、おじさんは、白^{しろ}い犬^{いぬ}の頭^{あたま}をなでました。犬^{いぬ}は、おとなしくしていました。おじさんは、よく犬^{いぬ}の種^{しゅ}類^{るい}を知^しっています。また、どの犬^{いぬ}もかわいがありました。犬^{いぬ}もまた、かわいがる人^{ひと}をよく知^しっていますようです。

ジョンは、やつとボールを見^みつけて、うれしそうに、くわえて走^{はし}ってきました。おじさんも、喜^{よろこ}んで、ジョンのそばへくるのを待^まって、犬^{いぬ}が、ぐるりとまわって、前^{まえ}へボールを

おくと、だくようにして頭あたまをなでてやりました。

「おりこうですね。」と少年しょうねんが、これを見て、いいました。

「ふせ！」と、おじさんが、いうと、ジョンは、地ちの上うへへはらばいになりました。

「伏進ふくしん！」

ジョンは、はらばいになりながら進すすみました。これを見ていた武夫たけおは、善吉ぜんきちに向むかっ
て、

「戦争せんそうにいつて、敵てきに見みつからないようにして、進すすむんだね。」と、ささやきました。

白い犬しろいぬも、おとなしくして、ジョンのするのを見みていました。すると、少年しょうねんは、

「ごらんよ、おまえも、あんなことできるかい。」と、自分じぶんのほおを、犬いぬの顔かおにおしつけ
ました。おじさんは、見みて、笑わらっていました。

「なにもおしえないのですか。」

「この犬いぬは、ぼうきれを投なげると、くわえてくるぐらいのものです。」

「その犬いぬは、獵りようけん犬けんですね。」

「だから、にわとりや、ねこを見みると、追おいかけて、しかたがないんですよ。」と、少年しょう
年ねんは、いいました。そのうちに、少年しょうねんは、犬いぬをつれて、あちらへいつてしまいまし

た。

おじさんも、一ひととおりの茶色ちやいろの犬いぬの訓練くんれんがすむと、善吉ぜんきちと武夫たけおに向むかって、
「さようなら。」と、いつて、ジョンをつれて、お家うちへかえつていきました。

「ああ、きようは、かえりがおそくなつたね。ぼくお家うちへかえつて、きつと、おかあさんにしかられるだろう。」と、武夫たけおは、しんぱいしました。

「復習ふくしゅうがあつたと、いえばいいだろう。」

善吉ぜんきちは、うそをいつて、わるいと思おもつたが、そういうことに、きめていました。

「ぼくは、原はらっぱで、犬いぬのおけいこを見てきたと、いおうかしら。」と、善吉ぜんきちが、いいました。

「残のこされたといわなけりや、どっちだつておんなじじゃないか。」

日ひにまし涼すずしくなりました。原はらっぱに立たつて、だまつて空そらをみあげながら、鳴なき声こゑのし方ほうに目めをそらすと、黒くろく小ちいさく、群むれをなして、渡わたり鳥どりの飛とんでいくのが見みられました。ワン、ワン、犬いぬが、ほえています。その方ほうを見みると、いつかおじさんのつれてきた、ジョンでした。

「ジョン、ジョン。」と、善吉^{ぜんきち}が、呼びました。ジョンはかけてきました。そばには、武夫^{たけお}のほかに信一^{しんいち}もいました。

「どこの犬^{いぬ}なの？」

信一^{しんいち}が、きました。

「いつかどこかのおじさんがつれてきた犬^{いぬ}だよ。」と、武夫^{たけお}は、あたりにおじさんがいないかと見^みまわしました。どうしたのか、おじさんの姿^{すがた}が見^みえません。

「ジョン、どうしたんだい？　ひとりかい。」と、善吉^{ぜんきち}が、いうと、ジョンは、喜^{よろこ}んでとびつきました。

「きつと、道^{みち}をまぐれたんだよ。」

「ぼくたち、どつかへかくれよう、そうしたら、ジョンは、どうするだろうか。」と、武夫^{たけお}が、いいました。

七

「そうだ、いいことがわかった。」

「どんなこと。」

武夫たけおと信一しんは、善吉ぜんきちの顔かおを見みました。

「ジョンが、まりをさがしている間に、僕ぼくたちはどこかへかくれるのだよ。そうしたらジョンは、どうするだろうかね。」と、善吉ぜんきちは、いいました。

「どうするだろう？ おもしろいな。」と、信一しんがいました。

「お家うちへ帰かえっていくかもしれないよ。」

「いや、きつと、僕ぼくたちをさがすだろう……。」

「よし、やってみようよ。」

武夫たけおはジョンにまりを見みせてから、自分じぶんは、向むこうのくさむらの方ほうへ走はしっていきました。

そして、わからないように、草くさの中なかへかくしてきました。

武夫たけおは、息いきを切きらしてもどると、

「ジョン、まりをさがしておいで。」と、すぐ命令めいれいをしました。ジョンは、かけていきました。

「さあ、この間あいだにかくれよう、どこがいいかな。」
先に立たって、走はしっている善吉ぜんきちが叫さけびました。

「僕ぼくの家うちの物置ものおきへいこうよ。」

三人にんは、原はらつぱを犬いぬのいっただ、反はん対たいの方ほうに向むかって走はしりました。

広ひろい道どう路ろのあちらは、すぐ町まちになつています。そして、いちばん近ちかいところに、善ぜん吉きちの家いえがありました。土ど管かんや、じりや、セメントなどを、あきなつていました。物置ものおきの中なかには、これらの品物しなものがつまれていました。三人にんは、きゆうくつそうに、体からだをおしあつて、片かたすみにかくれて、かわるがわるふし穴あなから原はらつぱの方ほうをながめていました。

「どうしたんだろう、こないよ。」

「お家うちへかえつたんじゃないか？」

とつぜん、のぞいていた信しん一いちが、

「きた、きた、ジョンが、きちがいのようになつて、さがしているよ。」

「こつちへこない。」

「足あしあとをさがしているから。」

「まりは、どうした？」

「くわえている。」

「かわいそうだから、出でてやろうか。」と、善ぜん吉きちがいました。

しかし、まもなくジョンは、小舎こやのところまでやってきました。そして、まりを下したへおいてさも悲かなしげに、鳴なき出だしました。

「ジョン。」と、このとき、三人にんは、先さきをあらそつて、物置もの置きからとび出だしました。

「ふだに番地ばんちが書かいてあるから、これからつれていってやろう。」と、信一しんいちは、ジョンの頭あたまをなでました。

庭にわに、梅うめもどきの実みが赤あかくなつて、その下したに、さぎんかの咲さいている家うちがありました。そこが、ジョンのお家うちでした。

三人にんは、げんかんに立たつと、ジョンが尾おをふつて、ワン、ワンと喜よろこんで鳴なきだしました。しょうじ戸どをあけて出でてきた、おばさんは、犬いぬと子供こどもがいるので、見みてびっくりしました。三人にんが、まよい子ごになつた、ジョンをつれてきたことを話はなすと、

「まあ、まあ、それは、ありがとうございます。じつは、いなくなつたのでしんぱいして、みんなが、さがしに出でているのですよ。いつもつないでおくのですが、朝あさ、くさりをといてやったら、いなくなつてしまったのです。」と、おばさんは、おれいをいいました。

武夫たけおは、ジョンをくさりにつないでから、

「さようなら。」と、いいました。

三人は、いいあわしたようにジョンの方をふり向きながら、門を出ようとすると、ジョンは、ついていこうとして、くさを鳴らしてほえました。

「ぼっちゃん。待つていてください。」と、お婆さんが、あわてて奥から出てきました。そして、げたをはいて、紙に包んだものをみんなのところへ持つてきました。

「これは、ほんのおだちんですよ。あめか、おかしでも買って、わけてください。」と、お婆さんは、信一の手に渡そうとしました。

「いいえ、そんなものいりません。」と、信一は、手を引つこめました。

「そんなこというものでありません、さあ取つてください。」と、こんどお婆さんは、善吉に渡そうとしました。

「おかしなんか買うとしかられます。」と、善吉も、手を引つこめました。

「じゃ、えんぴつを買つてわけてください。」と、お婆さんは、むりに武夫の手にぎらせました。武夫は、どうしたらいいかと思つたが、お婆さんが、これほどいつてくれるのを、ことわるのはわるいと思つて、いただいて外へ出しました。

「困つたなあ、これどうしたらいいだろう。」と、武夫は二人にそうだんしました。

「じゃ、えんぴつを買つてわけようよ。」と信一が、答えました。

「武ちゃん、君、あずかっておいでよ。」と、善吉がいつて、三人は、原っぱへもどつてきました。もう西の方の空が、赤くなりかけていました。

「あつ、紙しばいのおじさんがきている。」

三人は、子供たちの集まっている方へかけ出しました。そこには、小山も、かね子も、光子も、とみ子もきていました。

「ね、黒めがねのおじさんが、支那へいくんだつて。」と、三人の顔を見ると、小山はいました。

「ほんとう？ 黒めがねのおじさんが、支那へいくの。」と、武夫が、おじさんにききました。

「ほんとうだとも、こんど宣撫班になつて支那へいくのだ。」と、紙しばいのおじさんは、答えました。黒めがねのおじさんは、いつかこの原で、樺太へ旅行をしたときの話をしてくれました。

「宣撫班つて、支那人のせわをしてあげるの。」と、とみ子さんがたずねました。

「ああ、そうだ。そして、支那の子供におもしろいお話をきかせてやるのさ。どんなに喜ぶだろうな。」

「どんなお話？」

「そのお話が、あのおじさんのことだから、日本の子供のとき。きっと君たちのお話をして、日本の子供は、みんなしようにきで、やさしくて、いい子ばかりだということだろう。」と、おじさんは、笑いました。

「そうかなあ、僕たち、あのおじさんに、旗を送ろうか。」

「そうだ。ジョンのお家からもらったお金で、旗を買おう。」

「僕も、お金を出すよ。」と、小山が、いいました。赤土の原っぱには、赤々として、夕日がうつつていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「せうがく三年生」

1939（昭和14）年6～12月

※表題は底本では、「赤土《あかつち》へくる子供《こども》たち」となっています。

※初出時の表題は「赤土へ来る子供たち」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤土へくる子供たち

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>